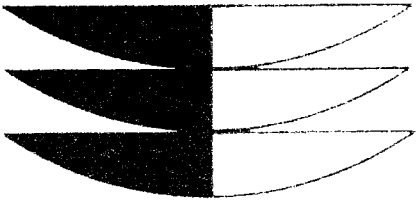
日本SFノヴェルズ

産霊山秘録

日本SFノヴェルズ



産霊山秘録

半村 良

早川書房

著者略歴
昭和8年東京生れ
第二回SFマガジンコンテスト（1962年）入選
主著書
「およね平吉時穴道行」
「石の血脈」（以上早川書房刊）

検印廃止

産霊山秘録

昭和四十八年三月三十一日 発行
昭和五十年二月十五日 六刷

定価 一一〇〇円
（〇〇九三一八二〇一〇一一六九四二）

著者 半村良（はんむら りょう）
発行者 早川清
発行所 株式会社 早川書房
郵便番号 一〇一
東京都千代田区神田多町二ノ二
電話 東京（二五二四）一五五一〜八
振替番号・東京 四七七九九番
乱丁・落丁本はお取替えいたします

印刷・三松堂印刷株式会社 製本・株式会社明光社

産霊山秘録

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

◆日ノ民

古ヘ山山ヘメクリテ神ニ仕フル人アリ。タタ日トノミ稱フ。高皇產靈神ノ裔ニアリ、妣ナクシテ畸人多ク生レ、產靈ノ地ヲ究ムト言フ。

（神統拾遺）

目次

上の巻

神変ヒ一族……九
真説・本能寺……七三
妖異関ヶ原……一三三
神州畸人境……一九一

下の巻

江戸地底城……二五五
幕末怪刀陣……三一四
時空四百歳……三八二
月面髑髏人（びと）……四四四

装幀・挿画　武部本一郎

上の巻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

神変ヒ一族

一

春の終りの生暖かい風が、京の町へ向って吹いて行く。

ここは洛南、醍醐三宝院の一角。茶席がしつらえてあり、客が三人いた。亭主はもちろん門跡の義演僧正で、三人の客はいずれも商人であった。小窓の外を横切る木の枝に若芽が萌えだしていて、屋内に鮮やかな萌黄色の影がさしている。

その時義演僧正はいわくあり気な表情で、じっと三人の客を観察しているようであった。客たちはいま、この部屋へ入って来た若い美僧の手もとを熱心に見つめている。

婦のように唇の赤い僧は、運んで来た新しい一幅を正面の床に掛けおえると、恭しく一礼して立ち去った。

呀ッ、と息をのむ気配が三人の客の間に起った。奈良の蜂屋紹佐、松屋久政、堺の天王寺屋こと今井宗及。

三人の客はいずれも当代一流の茶人であり、同時に富商でもあった。

「ご門跡さま、これは……」

若芽の緑が映えたばかりではない。三人とも極度の昂奮に顔色を蒼くしている。
「か、開山墨跡」
ややあって、松屋久政がかすれ声で言う。
「さよう」
僧正は何やら愉しそうに微笑していた。
「ご無礼をつかまつります」
たまりかねたように蜂屋紹佐が座をすべり、凄まじい筆勢を示す床の掛軸へにじり寄った。
「まさしくこれは圜悟克勤の真跡」
「さすがにお目が高い」
僧正は膝に手を置いて、開山墨跡に見とれている天王寺屋の顔へ、ちらりと視線を走らせながら言った。
圜悟克勤ははるか宗の時代の禅僧である。
「まさか二つとあろうとは……のう宗及どの」
蜂屋紹佐は天王寺屋をふり返って言った。
松屋久政はこの時代の茶人の長老の一人である。彼は既に何十回となく圜悟の墨跡に接してよく知っているが、一世代下に当る蜂屋紹佐と天王寺屋宗及は、二度か三度しか見ていない。
圜悟は禅録「碧巌録」の大成者として名高いが、茶の湯と関係の深い大徳寺派直糸の祖として、茶人の間では神に等しく扱われていた。したがって圜悟の墨跡はすこぶる貴重であり、茶道の開祖村田珠光が一休禅師より譲り受け、以来開山墨跡と称して神秘的な宝とされているのだ。
そのふたつ目があらわれたのである。

「どういう機縁でこれがご門跡さまのお手もとに……」
松屋久政はようやく落着きをとり戻して訊ねた。その時にはこの老い枯れた茶人の瞳にも、烈しい所有欲が火のように燃えさかっていた。すると蜂屋紹佐が突然両手をつき、
「手前におゆずりくだされ。お願いでございます」
と叫ぶように言った。
「なんの、私めにこそ」
松屋久政が間髪を入れず、紹佐の声をおしのけるように言った。
「さて……」
僧正は相変らず愉しむような微笑を浮べたまま客を眺めていた。
「ご両人とも……」
天王寺屋がはじめて口をひらいた。「ご門跡さまが何ゆえ今になってこの稀代の墨跡を床におかけ遊ばしたか、そこの所をよく考えてみようではございませぬか」
「今になってとはどういうことじゃ」
松屋久政が問い返した。
「ご門跡さまから茶のおまねきをおうけしたとき、手前は千家もまいるものとばかり思っておりました。しかしこの席に千家の姿はありません。なぜでしょうか」
天王寺屋は挑むように僧正の瞳を見据えながら言う。
松屋久松はそう言われて小膝を叩いた。
「この世にただ一人、開山墨跡を蔵しておるのは千利休じゃ」
「さよう。ご門跡さまは圜悟の墨跡を、手前ども三人の内の誰かにおゆずりくださろうという思し

召しらしい。……でございましょうな」
「さすがは今井宗及どの。ようお見とおしのことじゃ。ただ、この墨跡は拙僧のものではござらぬ。さる高貴のお方のお手もとより出されたものゆえ、拙僧としても人の好ききらいや情にほだされるわけにはまいらんでのう」
僧正が言うと、それまで恬淡として茶の境地に浸っていた三人は、いともあっさりと茶人の貌をすててしまった。一瞬の商機に命を賭ける戦国商人のたくましさを露呈し、ものさびた茶席の風が、あらあらしい熱気を帯びはじめたのである。
「まず銭五百貫」
蜂屋紹佐が最初の値をつけた。
「五年ほど前、千利休は開山墨跡を銭一千貫文で手にしたそうだがのう」
僧正はよそごとのように言った。
「それは天下にただひとつということの上でございます。二つ目は値がさがりましょう」
「七百貫文。茶の湯を好む大名小名が日ましに多くなっておりますれば……」
松屋久政が値をあげた。
「いや、千家が一千貫で購ったからには、一千貫が相場でしょう」
天王寺屋が平然と言う。
「い、一千一百貫」
紹佐は蒼白になっていた。米一石銭一貫文の時代である。茶席を飾る黒跡が米千石の価を超えるとなると、いかに富商であっても顔色が変ろうというものだ。
「一千三百貫」

天王寺屋はすぐ値をあらためた。
「い、一千五百……いかな儂でもこれ以上は出せん」
松屋久政が叫んだ。
「一千六百貫」
と紹佐。
「一千七百貫」
天王寺屋は冷酷な表情で言った。しかし膝の上に置いたこぶしの内側は、じっとりと汗ばんでいるらしい。
「いま一服、いかがでござろうかな」
僧正はそう言って釜のふたに手を伸ばした。

二

陽ざしが雲にうすれ、少し温度がさがって、夕風に似た微風が、庭の樹々にしのびやかな音をさせている。商人たちをかえした義演僧正は、私室にとおしたもう一人の客に対していた。
「二千貫文とはかたじけない」
軽く頭をさげた客は公家である。名は山科言継。でっぷりとした大柄な人物で、歳は六十がらみ。口許にきついものを漂わす以外は、濶達でどこやらのほほんとした印象さえ受けとれる。特徴は赤く酒焼けのした鼻で、名うての酒好きであった。名字領の山科郷はこの醍醐のすぐ北に接し、京に

至近であるため何とか武家の押領をまぬがれ、所領からの年貢が全く絶えた公家も多い中では、まず恵まれたほうと言えた。家格は摂家、清華に次ぐ羽林家に属し、さきの権中納言である。

「天王寺屋がその気になれば、いかに蜂屋、松屋といえども勝負にはなりますまい。わきから無用な煽りだてをせねば、せいぜい千二三百貫どまりでありましたろうに」

僧正はおかしそうに言った。うち続いた戦乱の世に、貴族、僧侶の社会的地位は有名無実となりはて、素性のいやしい武家や商人にいいようにふりまわされていたのが、久しぶりに思うさま操りとおせたので、ひどく溜飲をさげているらしい。

「お約束のとおり、いずれ銭が届きましたら三百貫をお納めください」

「かたじけのうございます。しかし思えば思うほど乱世でございますなあ。一介の商人が茶席の飾りに銭二千貫を費やすとは」

すると言継卿は含み笑いをした。

「義演どの、その言いようはちと身にこたえますぞ」

「なんと仰せられます」

「乱世はお互いさまじゃ。さきの権中納言ともあろう身が、このような不正をはたらいているではありませぬか」

言継卿はひどく間のびした言い方であった。僧正はそれにつけいるように、鋭い声で言った。

「正倉院にはまだあの者たちの目の色を変えさせるものが積まれておりましょう」

「それは山ほどあるようです。しかしあの三好、松永の党でさえおそれ畏んで手をつけぬ正倉院です。いくら私めが痴れ者でも、このようなことは、二度と願わしくありません」

言継卿にそう言われ、僧正は御物の持出しをそそのかしてたしなめられたような気分になった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.